
窓の向こう

Reiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓の向こう

【Nコード】

N6443G

【作者名】

Reiko

【あらすじ】

色んな場面での人の心を描いた小話です。どちらかという詩に近いので、読み難い可能性があります。気味が悪い描写が時々あるので、ご注意ください。

桜の終わり

子供の頃は無邪気に喜んでいた桜。いまはただ、散る姿だけを見ていた。映画やドラマでは桜の木下で告白、とかあるけれど、私はもうそんなことはしない。純粹に桃色を美しく思えたあの頃が懐かしかった。

心の中でもやもやと曇るこの感情。
桜を見上げて、ただ綺麗と思うことはできない。なにかに触れているようで、なにかを盗っているようで、その美しさに見惚れることはできなかった。

幼稚ないたずら心を抱えて遊んでいた時間なんてもうとつとくに過ぎた。もう私は育ってしまった。光る木漏れ日が邪魔なくらいに輝いていた窓も、今日は光を通すことなくただ開ききっていた。

窓から頭を出して、ひらひらと部屋に舞い込みそうになった桜を手のひらで放り出した。部屋に桜が入って来るのは嫌。それだけ嫌っているんだ、と言いつ示すかのように窓をばたんと閉じた。

窓を閉じると、歌っていた鳥たちの声が聞こえなくなった。少し寂しくなったけれど、もう一度、あの綺麗なようにで残酷な光景を見る気にはなれなかった。自らの姿を見下ろすと、あの桜のような色の着物。お気に入りだったはずなのに、今すぐ脱ぎ捨て、真っ黒な物を着たかった。

「あの方がいなくなってもう一年……」

愛おしいあの顔の表情が次々と浮かび、切ない想いが胸を掠めた。

懐かしいあの声、あの顔、あの姿。また私の前で生きて、それを願うことはできない。

私はもう自由。だけど、その代わりに、もう心の支えとなるものはなかった。

桜の残酷さ、それは私なりに感じていた哀しみが生んだものだった。

終焉を迎えて（前書き）

死体の描写があります。苦手な方はご注意ください。

終焉を迎えて

即死だった。青酸カリの猛毒に侵された顔はげっそりと角張っていた。

「どうして……」

刑事が数人と、その足元に横たわる遺体。後ろの人ごみの中からは泣き声や涙声、叫び声さえも聞こえる。

「毒死、か」

先頭に立っている刑事が溜め息混じりに呟いた。

目を見開き、無表情に横たわる男の遺体は、堪らなく気味が悪かった。

その場にいた全員が遺体に触れるどころか、近づくことも躊躇っていた。

突然、一人の女刑事が遺体のそばに寄った。周囲は驚き、その刑事の一つ一つの動作を食い入るように見つめていた。

彼女はずっと遺体の顔を見下ろしていたかと思うと、いきなり死んだ軀の横に跪く。

「綺麗……」

囁くように、目を見開きながら言う。その手が、死体の青白い頬を這った。

周りの者は彼女を止めようと駆け出そうとした。しかし、先頭でじっと見守っていた老人が、彼らをそっと制した。周囲は驚き、女刑事の一つ一つの動作を食い入るように見つめていた。

「なんで、こんなに綺麗なの」

彼女の細い指が死体の目元をなぞる。綺麗、そう呟きながらまじまじと遺体を凝視している。二度と開くことのない瞼にそっと触れながら、壊れ物を扱うかのように首元を手の甲で擦っている。

確かに、肌は白く、目を見開いていなければ綺麗かもしれない。だが、その言葉を死人に対して言うには恐怖が大きすぎた。女刑事は気持ち悪いなどという感情は存在しないかのように遺体に触り、ひたすら「綺麗」と呟いていた。

それを見ていると背筋に気持ち悪さがこみ上げてくる。あまりの不気味さんい鳥肌が立ち、寒気がしてきた。同僚が死んだ人間を「綺麗だ」と言い、躊躇いもなく触っている。悪夢を見るのにはそれだけで十分なほどだった。

「濡れてる」

彼女が、ふいに振り向き、そうささやいた。

「瞼が、目尻が濡れてるの」

懐かしむように、涙を堪えるように、たまらなく寂しそうに、もう一度ささやいた。それだけ言うと、その女刑事はもう一度死体に体を向けた。

「生きてたんだね。生きてた、生きてた。だから、こんなきれいな姿で……」

そこまで言うと、遺体を抱きしめるように、起こす。一般人にとって、死んだ人間の軀を抱きしめるなど、とてもではないが出来なかった。ましてや、この目を見開いた青白い顔の死人を抱き起こすなど、絶対に無理。

恐怖と信じられない、という眼差しが彼女に一斉に降りかかった。

しかし、彼女は気にせず遺体を腕のなかで抱きしめたあと、元通りにそつと寝かせた。ポケットからハンカチを取り出すと、遺体の目をそつと拭い、立ち上がった。

その桜模様のハンカチを遺体の顔に被せると、人ごみをかき分け、車の方へと戻って行った。

捜査はどうするんだ、と大声で叫ぶと、

「上司から呼び出しがかかってますので」

という彼女の呑気な声がエコーのように返ってきたのだった。

鬼の目

真つ暗な闇。自分の足元が見えない、周りも見えない、何一つ見えない。家の近くの川原で寝そべっていたら、こんな世界に引き込まれた。

とにかく、ここに来る前の事情なんてどうでもいい。それより、この闇。何も見えない。隣にいたはずのあの人の手も触れない、周りの空気は凍るように冷たかった。

ふと、手を空中に浮かせてみると、なにかぶにぶにと柔らかいものに触れる。それは太い縄のような大きさで、縋るものがなかったの
で、思わず掴んでしまった。

「きゃっ……」

ぬめぬめとした、気持ち悪い感触。生暖かい液体が手を伝い、袖の間から服に入り、肩の辺りにベトベトしたそれが触れる。

私が掴んだもの、それは鬼の尻尾だった。ぬるぬると手から滑り落ち、鬼がふりかえって私を睨んだ。暗いせいか、目しか見えない。そのキラキラ光る目はこちらをじろり、と睨んだ。一つ二つと目が増えていく。本当は2つずつ増えるはずの目が、なぜか一つずつ増えていく。すべて逸れることなく私を見つめる。

鬼の目が、後ろから、前から、左右から、斜めから私を睨む。何も言わず、尾を引っ込め、私をジトジトと見つめる。その目は何を伝えているのか、意図がまったく分からなかった。深い悲しみを奥に秘めているような漆黒の眸は瞬きもせずただ私を睥睨する。

鬼の目は私を見ていた。突き刺すような目で一ミリも視線を動かさず、私を見ている。もう恐怖はなかった。鬼の尻尾は暗闇に隠れ、光る目しか見えなくなっていた。

面白い、なんて思っていたとき、不意に鬼の醜貌な手が頬を荒く撫でた。

とっさに私はその手を握り返した。鬼は驚いたように私を見る。

私はその時、初めて鬼の涙を見たのだった。

darkest kisses

彼女は俺を痛いくらいに抱きしめる。

心の傷を隠すように、俺の背中をきつく締め付ける。当初は可愛かったその素振りも、今となっては冷酷になってきていた。

「あの、痛い、背中」

「……」
「ごめん」

何かを、抱えている。それは、その圧迫するような体温から伝わってきた。

俺より頭一つ分くらい背が低い彼女は、抱きしめる、というより俺に抱きつく形ですがりついてくる。

可愛い、そう思った。でも、その泣き顔は、愛おしすぎた。時折、彼女は「もう嫌」と、耐えるようにに呟く。白い光の中で「死にたい」と呟く彼女は、本当に怖かった。

憂鬱に満ちた表情で床にぺたりと座り込む。俺を抱きしめていた腕を解いた。もう真夜中、当然部屋は真っ暗だった。猫のように光る眼で見つめる彼女を見上げると、その細い指が俺の首に纏わりついた。だんだんと締め付けがきつくなり、次第に息苦しくなってくる。

「……ごめん、私と死んで」

「つく……」

息ができない。目の前が真っ白になった。尖った爪が首に食い込み、鋭い痛みと、生ぬるい液体が首を伝った。

失神する手前まで来た。意識は薄れ、痛覚もなくなる。記憶もなくなりはじめたが、彼女の痛切な表情だけは脳に焼きついた。

「……………」

手を離された。必死に酸素を吸い、首に流れた血を拭う。

「……………ごめんね。やっぱり、逝かないで」

イラついた。俯いてひっそりと囁いた彼女を床に押さえつけ、首を思いつき手で締め付ける。彼女は、息苦しそうな表情をしていたが、決して声に出すことはなく、徐々に静かになっていった。諦めているのだろう。目を閉じて、空気を吸おうとはせず、横たわる。

残念ながら、俺は彼女を楽にさせるつもりはなかった。彼女の顔がだんだん青白くなり、限界に達したところで手を離す。

「……………つはあ、つ……なんで、死な、せてくれなっ……………い、の」

彼女もまた、俺と同じように酸素を貪る。ぽたり、ぽたり、と流れる血を拭いもせず、俺は彼女の手を引つ叩いた。

「っ」

軽いキスを落とし、寢室に戻った。もうするなよ、と小さく呟きながら。

処刑場

一人二人、消されてゆく。前に一步、一人が恐る恐る出たかと思うと、首が一体吹きとぶ。ああ、もうすぐ自分だ、と思わず目を閉じる。

俺の横の奴が一步、前に出た。黒髪の女だ。なんの罪を犯したのかは知らないが、虚ろな表情で俯いていた。

先頭でノコギリを持つ男の掛声と共に、ぎらりと光る刃が宙を舞い、やがて女の首を切った。その面は生前と変わることなく俺の足元に転がった。

俺はこういうものを見慣れてる。気持ち悪いなんて感情はとっくどこかへ消えている。自分の立場をつい忘れ、その綺麗で真っ赤に染まった首を素手で拾い上げた。よく見ると目を見開いている。自分のシャツで朱色の首を拭った。

死んだ人間の骸骨は案外柔らかい。残った体は首から先を失い、俺の手前に倒れていた。その周りにも、同じような無残な姿の死体が一つ、二つ、三つ、四つと限りなく横たわっている。

俺は首を体の横に転がして、前の奴らと同じように、しかし堂々と前に出た。さあ切れ、と首を突き出す。俺を殺そうと、目の前の男が斧を振り上げたとき……

大男が、その手を止めた。

「……やめておけ」

俺も殺人野郎も、驚いた目でその男を見上げる。大男は黒い仮面をかぶったまま、ぼそぼそと口を開いた。

「旅人を殺つてはいけない。この者はまだ逝く途中だ」

……ああ、そういうことか。俺はまだ死んでいないんだ。やっと分かった。此処は錠を破り、死んでから成仏しなかった逝人の処刑場なんだ。

いま、咄嗟に思い出した。俺の目の前で切られた黒髪の女の顔が、幼いころに失った俺の母親そっくりだったことを。

残酷

7月の終わり、兄が死んだ。

蝉の鳴き声に紛れ、何も言わず、兄はひっそりと逝った。僕は突然の出来事に多少は驚いていたが、悲しみも寂しさも何も感じなかった。非情な人間だ、僕は。

兄が傷つけたものは、兄の存在以上に大きかった。だから、僕は兄が死んでも生きても、同じだと感じていた。

「あなた、泣かないの？」

棺に納められた兄に、何気なく触れていると、頭上から声が聞こえた。姉だ。

「泣くって、どうして」

「実の兄が死んだんだよ」

「別に悲しくない」

僕が無情に呟くと、姉は俯いた。僕は見逃さなかった、姉の喪服のポケットから覗いている、小さな目薬の瓶を。

「こんなことしてまで泣きたいの、姉さんは。優しいね」

僕は姉の目薬の瓶を、取り上げた。姉は虚ろな目で、瓶から僕へと視線を移す。

「姉さんだって恨んでるんだろ、兄さんのこと」

「 どうだろう? 」

姉の目つきが鋭くなった。やはり姉も、根に持っていたんだ。僕だつて、一秒たりとも忘れたことはない、兄が犯したあの罪を。

「 奈々が死んだの、まだ兄さんのせいだと思つてたの? 」

「 当然だ。僕は最初から最後まで兄さんを信じたくなんかない 」

「 どうして? 」

「 あいつが奈々を殺したからに決まつてる 」

「 奈々は自殺。自殺なのよ? 」

「 姉さんだって、そうは思つてないんだろ 」

僕は、兄の好きだった歌手のCDを乱暴に棺のなかに押し込んだ。こんな汚らわしいものに用はない。そんな僕の手つきを見ていた姉は、悲しそうに目を伏せた。

「 残酷ね 実の兄弟同士でこんなことしなきゃいけないなんて 」

「 全部兄さんが悪いんだ、奈々のことも、全部 」

姉さんは、伏せた目を少し上げた。溜息が聞こえる。

僕は、兄に殺された妹 奈々を決して忘れなかった。奈々は、 1

3カ月前、歩道で暴走する自転車にぶつかり、道路に弾き出された。そして、トラックに轢かれ、片肺を失った。不幸にも、暴走自転車に乗っていたのは、兄だったのだ。

奈々は事故の5日後に亡くなった。奈々は、兄が殺したも同然だ。しかし、その事実を知っていたのは、死ぬ間際の奈々にひっそりと伝えられた僕と姉、犯人の兄、そして奈々本人だけだった。しかし、兄はそんなあまりにも残酷すぎる、尚且つ自分にとって不利な真実は受け入れず、大きな嘘を作り上げた。

『奈々は、自殺した』

と。僕が真実を聞いたことなど知らない兄は、涼しい顔で、僕にこの言葉を読み上げた。兄は、自分が殺した実の妹の死を悔やむことはしなかった。

分からなかっただろう、僕がどれだけ奈々を愛していたか、兄には理解できなかっただろう、奈々は兄より何百倍も生きる価値があった人間だということを、兄には。

僕は当然、兄を恨むようになった。奈々が死んだその日から、僕たち兄弟はお互い鬼そのものと化していた。

姉も奈々をそれなりに可愛がり、愛していた。だからこそ、純情すぎる姉は、「理想」を求めた。そして、実の兄が実の妹を殺すのは、姉が言う「理想」には当てはまらなかったらしく、姉は「理想」を保つために、自分の兄が妹を殺した、ということは胸の奥にしまいこみ、奈々は自殺だと自分を騙しこんでいた。

僕はそんな姿の姉を、誰よりもよく知っている。そして、その姉の

姿は、何よりも残酷でグロテスクだった。そんな姉が、兄の通夜のあと、最初に口にしたのはこの言葉だった。

「奈々が死んだときは、みんなこんなに悲しそうな顔、してなかったわ」

哀しげな顔で、絶望の塊のような声で。姉は、兄の通夜のときも、葬式のときも、ずっとこの調子だった。そして、兄が厚い扉の向こうで炎に包まれ、焼かれている今、姉は奈々が死んで初めての涙を流した。

「悔しい、悔しいよ！どうして奈々は死んだの？」

もう、一年以上も前のことなのに。今更泣いて叫んでいる姉を見て、僕は笑った。亡くなった者とは違う、亡き者に対する涙。それを笑う僕。そして、お互いを殺しあおうとした兄妹。たまらなくグロテスクだった。

「姉さん、奈々は死んだんだよ」

僕は姉を慰めるつもりいで言った。この言葉は、そんなに無情で冷たい言葉だったのだろうか。振り返った姉は、大粒の涙をポロポロとこぼすと、しゃがみこんだ。

「……………そうね」

しゃがみこんでしまった姉を起こすと、僕は先ほどの目薬とは別の瓶をポケットから探り出した。

「これ、奈々の涙。姉さん、飲む勇氣、ある？」

僕はそう告げ、僕と小さな瓶を見比べる姉の目の前に瓶を翳した。

「奈々が亡くなったとき、主治医の先生にもらったんだ」

正直言つて、吐き気がする。僕は、瓶を恐る恐る受け取るうとする姉の手に、それを握らせた。

「飲まないけど……、貰っていい？」

「いいよ」

姉は、大切そうに瓶をぎゅっと手のひらで握り締めると、兄の遺骨のもとへとかけて言った。両親が驚いた顔で、姉に問いかける。

「どうしたの？」

「なんでもない」

そんなことを言いながらも、姉は瓶の蓋を開ける。それを見た僕には、姉が何をするのか、一瞬で理解した。僕は止めはせずに、遠くから見守る。

「兄さん、奈々、今度こそ仲良くするんだよ」

涙を堪えて言っているのは、遠くからでも分かった。姉は、兄の遺骨の上で、そっと瓶を傾ける。少し黴臭い液体は、しんなりと染み込んだ。姉は空になった瓶の蓋を閉め、自分のポケットに入れ、兄から離れた。

『奈々は、自殺した』

『兄さんは可哀想だ』

『僕のせいじゃない』

『私のせいじゃないわ』

人間とは、グロテスクな生き物だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6443g/>

窓の向こう

2010年10月28日03時51分発行